



アンダルシアを代表する白い家並み



ミハスの名物“ロバのタクシー”

世界地図でスペイン南東部をご覧下さい。意外やヨーロッパとアフリカが近くに感じられます。モロッコと海峡を挟んで、角を出しているように半島が突き出ている地域が見られます。この半島がイギリスの直轄地であるジブラルタルと呼ばれるところです。半島は約 6km^2 (皇居の約 5 倍) にすぎず、しかも大半が「ザ・ロック」と呼ばれる石灰岩の巨大な岩山で占められています。しかし、このちっぽけな存在こそが、

何世紀にもわたるヨーロッパ列強の権利闘争が繰り広げられたところなのです。各国が固執する理由とは、たった 13km の海峡の左右が大西洋と地中海に別けられているため、当然この地が貿易上でも軍事上でも戦略的にも最重要地点となるからです。紆余曲折があったものの 1713 年以來、イギリスによりジブラルタルは占拠されました。おもしろいことに、イギリスのこの地についてのこだわりは伝説にさえなっています。



ザ・ロックを見ながら飛行機の通過待ち



伝説の主人公、この地域原産のバーバリー猿

この地域原産の“猿”（バーバリー種）が伝説の主人公で、この猿がジブラルタルを離れるときがイギリスによる統治が終わるといいます。時の名首相チャーチルはこの伝説を信じ、大まじめで政府を動かし「猿を増やせ！」と激を飛ばしていたといわれています。

ザ・ロックこと「ターリク山」（標高 426m）に登ると、驚くべきことに 360 度の大絶景が広がっていました。前方にはスペイン・ヨーロッパ大陸が重々と一大パノラマで連なります。

燦々たる太陽の後方にはジブラルタル海峡を隔てて、くっきりと意外にも近くアフリカ大陸がありました。頂上は不思議と静寂で、当時の自分の心境を詠ったかのようなサムエル・ウルマンの「青春」の詩の一説がどこからか聞こえてきました。ザ・ロックの頂きには苦悩・恐怖・失望を追い払う何かがあり、美、よろこび、希望そして力が、未知への探究心・驚異に魅かれる素直な気持ちが、人生への興味が……一気に湧き上がって来る何かがある。しかも勇気さえも、もらった感じにさえなってしまった……。

ザ・ロックから下界に降り、一步街の中に入るとそこは美しいクイーンズ・イングリッシュの世界。2階建てバスが走り、建物も習慣もアフタヌーン・ティもかたくなに、プチ英国がありました。ここは、チャールズ皇太子と故ダイアナ妃が新婚旅行で最初に立ち寄った地であり、ジョン・レノンとオノ・ヨーコが結婚式を挙げたところでもあります。ザ・ロックのほかには、ジブラルタルの南端「ヨーロッパ・ポイント」、鍾乳洞「聖ミカエル洞窟」、バーバリー猿の保護区「エイプス・デン」を観光しました。宿泊は 1932 年創業のジブラルタルで No. 1 のホテル「ザ・ロック」です。

翌朝、車窓から太陽を受けて輝く海の向こう側のアフリカ大陸を眺めながらアンダルシアの最南端タリファへと。タリファはイベリア半島に上陸したイスラム教徒が最初に建設したアラブの町で、町の名前はこの地を占領したターリク・イブン・マルムークからつけられています。ここから高速船に乗りジブラルタル海峡を約1時間で渡りました。この日は2月3日の節分だったので、日本人ツアー客全員で日本から用意してきた豆を甲板でまきました(ジブラルタル海峡船上豆まき大会)。

人口約80万人、アフリカ大陸の玄関として地中海の出入口に位置するタンジェは、古くから戦略上の要塞でした。モロッコ独立以前、国際都市タンジェは列強諸国による共同管理のもとにありましたが、自由な町でした。密輸やスパイが暗躍し、自由で甘く危険な香りにひかれた作家や芸術家たちも多かったです。また、タンジェは14世紀の大旅行家イブン・バトゥータの生まれた町でもあります。カスバ(要塞)、スーク(市場)、グラン・モスクなどを訪ねながら城壁に囲まれたメディナ(旧市街)を散策し、モロッコやサウジアラビアの国王の別荘が立ち並ぶタンジェの高級住宅街も歩きました。その後、大西洋と地中海のぶつかる「スパルテ岬」と「ヘラクレスの洞穴」を観光しました。波の浸食によってできたヘラクレスの洞穴は、ギリシア神話によるとヘラクレスが12の難業を終えた後にこの洞穴で休んだといわれています。穴の形が左右逆のアフリカ大陸のようでもあり、人の横顔のようでもあります。

「タンジェはタンジェ」といわれるほど、独特の空気が漂う国際都市タンジェは古来人種の交差点として知られます。芸術家たちを魅了し、数々の作品を生み出したところでもあり、しばしば19世紀に思いをはせるにはもってこいです。しかし、モロッコの海の玄関口であるタンジェを訪れる日本からのツアーは残念なことにほとんどありません。

バスはホテルを出発し、リフ山脈を走ります。険しいリフ山脈は弓の弦のように地中海に沿っ



穴の形が左右逆のアフリカ大陸や人の横顔を連想させるヘラクレスの洞穴



一見ねずみ男、“ジェバル”を着たベルベル人

て 300km にわたって広がっています。標高 2,000~3,000m のリフ山脈では、ベルベル系の諸部族が農業を基本とした生活を営み、独自の文化を保ってきました。また、この地方は豊かな鉱山資源にも恵まれています。

旧市街が 1997 年に世界遺産に登録された人口約 50 万人の町ティトアンに到着。15 世紀末にレコンキスタ(国土回復運動)により、スペインを追われてきたイスラム教徒とユダヤ教徒によって町が再建され、以来スペイン文化を独自のスタイルに昇華させてきたティトアンは、ほかの旧市街には見られないスペイン情緒が溢れています。“白い町”ティトアンは、アンダルシアの町並みと似ていました。スークは大勢の人で賑わい、街には「ジェルバ」と呼ばれるコートを着た一見ねずみ男風のベルベル人がいっぱいいました。

車窓から美しい花が満開のアーモンドの木々や団扇サボテンを眺めながら、本日最後の訪問地シャウエンへと。アーモンドの花は白とピンクで、一見満開の桜の木のように広がります。人口約 4 万人のシャウエンは山にへばりつくように広がる町で、何百年もの間、イスラムの聖域として

異教徒には門を閉ざしてきました。この町もスペインから逃れてきたイスラム教徒が加わって人口が増えました。“青と白の町”シャウエンは、何種類もの青色を使ったドアや道と白い壁が調和したメルヘンチックな美しさ。北モロッコの旅は、道中、緑の山並みの間合いに点在するベルベル人の白い家と、地中海の絶景がおりなす絵画世界でもあり、私がお勧めする一押しのレストランです。

タンジェからモロッコ第 2 の都市ラバトまでは約 250km。高速道路の両側はモロッコの大農業地帯で、イチゴ畑やサトウキビ畑、バナナやコルクの木々などが。モロッコは世界 3 位のコルクの生産地です。コルクはワインボトルの栓やコースターをはじめ、優れた断熱性や保湿性、耐久性などがあるため、建築物の材料にも利用されます。コルクは 9 年ごとに樹皮を伐採してとるので、木を切ることなくいつまでも生産できる究極の木材製品です。

人口約 200 万人、スペイン・ムーア建築と近代建築が調和したモロッコの首都ラバトに到着。ラバトの名前は 10 世紀頃に建てられた「リバート(異教徒とのジハードのための軍事的要塞)」



花が満開のアーモンドの木と団扇サボテン



青と白のメルヘンチックな町シャウエン

に由来しています。大西洋を一望できるレストランで昼食を済ませ、まずはブーレグレグ川の南岸にある「ウダイヤのカスバ」の観光。スペインに対する戦略上の拠点だった「ウダイヤのカスバ」は12世紀の部分と17世紀の部分があり、城壁の高さは8~10m、厚さは2.5mです。アルハンブラ宮殿を真似て造られたというカスバは、アンダルシア風の庭園が美しかったです。ラバトはモロッコの庭園都市と呼ばれています。市内の散歩ではいくつもの庭園とともに、白壁と青色の扉の家々と「ファテマの手」のドアノッカーが印象的でした。王宮には現国王モハメッド6世とその家族が住んでおり、毎週金曜日には国王が馬車に乗って敷地内のモスクへ行くパレードが行われます。王宮内には王家の子供たちだけが通う学校もありました。ここでは、衛兵が赤色の制服、警官が灰色の制服、使用人が白色の制服を着ています。フランスからモロッコの独立を勝ち取った元国王モハメッド5世の霊廟には、前国王のハッサン2世とその弟の棺も安置されていました。本日最後の観光は、高さ44mの未完のミナレット「ハッサンの塔」。12世紀にイスラム最大のモスクを建立する予定でしたが、スルタンが死に未完のまま放置されることになりました。現在は200本の円柱とミナレットを残すのみです。ちなみに、モロッコ以外の国ではモスクにはミナレットが4つありますが、ミナレットが1つだけなのがモロッコのモスクの特徴です。本日の宿泊は1913年創業の老舗ホテル「ラ・トゥール・ハッサン」で、館内は見事な装飾でした。

フェズ、ラバト、マラケシュとともにモロッコの4大古都の一つに数えられるメクネスは、モロッコ北部の肥沃なサイス平野にあります。人口約80万人のメクネスの街は溪谷を挟んで旧市街と新市街に分かれます。17世紀、時のスルタンはベルベル人が建設したメクネスを新たな首都に定め、多くの捕虜や囚人を使って街の大改造に着手しました。古い市街は破壊され、巨大な門やモスクや宮殿が次々と築かれました。大のフランスびいきで太陽王ルイ14世に心酔

していたスルタンは、モロッコの地にヴェルサイユ宮殿を築こうとしたといいます。しかし、彼は夢半ばで世を去り、政治の中心はフェズやラバトなどのほかの都市に遷され、メクネスは衰退の一途をたどり、壮大な夢は実現されずに終わります。街が輝きを放ったのはわずか50年ほどにすぎませんでした。

ムーレイ・イスマイルの命令により17世紀後半に建てられた「穀物倉庫跡」。小麦などの食糧のほか、スルタンの所有する12,000頭の馬が飼われており、この倉庫を満杯にすれば街は20年の籠城にも耐えられたといわれます。「ムーレイ・イスマイル廟」はモロッコで最も美しい霊廟。彼の眠る部屋には憧れのルイ14世から贈られた時計が掛かっていました。堅固な城塞にある「マンスール門」は建築家エル・マンスールの設計によるモロッコで最も美しい門。ムーレイ・イスマイルが造らせた最後の建築物です。スークにはメクネス名物のオリーブがたくさんありました。

古都メクネスの観光後は、イスラム文化の中心地フェズへ向かう途中に、モロッコ初のイスラム王朝「イドリス朝」を興したイドリス1世の眠る「聖者の町」ムーレイ・イドリスと広大な敷地にあるモロッコに現存する最大のローマ遺跡で世界遺産に登録されている「ヴォルビリス」に立ち寄りました。「ヴォルビリス」は西暦40年頃にローマの属領となり、人口2万人の大都市として3世紀末まで栄え、収穫された小麦やオリーブなどがローマに輸出されていました。ここでは美しいモザイクやカラカラ帝の凱旋門、公共浴場、デコマヌス(大通り)などを見学しました。

本日は終日フェズの観光。人口約90万人のフェズは、9世紀初頭に築かれたモロッコ最古のイスラム王都です。786年、モロッコにイスラム教の開祖モハメッドの子孫ムーレイ・イドリスがやってきてモロッコ初のイスラム王朝イドリス朝を興しました。彼の死後、息子のイドリス2世が809年にアトラス山脈の北を流れるフェズ川沿いの谷間に都を築き、王都フェズが



モロッコに現存する最大のローマ遺跡ヴォルビリス



フェズの旧市街(メディナ)のパノラマ



世界一複雑な巨大迷路フェズ・エル・バリ

誕生しました。そして、モロッコのイスラム王朝最古の都市フェズは中世以来宗教と文化の中心として繁栄を極めました。

まずは郊外にある16世紀の要塞からメディナの全景を眺めました。中央を流れるフェズ川に向かって町全体がすり鉢状になっています。いよいよ「フェズ・エル・バリ」と呼ばれる世界一小径の入り組んだ複雑な巨大迷路メディナの散策です。ここはフェズで最も歴史ある旧市

街で、くねくねと曲がる道の上に住宅がかぶさり、昼でも暗いトンネル状の通りも多いです。道が狭くて自動車は通行できず、坂が多くて起伏に富んでいるため荷物の輸送手段としてロバや馬が使われ、より一層混沌とした雰囲気醸し出しています。9世紀にチュニジアのカイランから来た姉妹の妹ファティマにより建立された「アンダルース・モスク」、1321年に建てられた高等教育施設「サリジ・マドラサ」、



荷物の輸送手段として使われるロバ



伝統的な手工芸の皮なめし

フェズを守護する聖者として現在も巡礼者が絶えない「ムーレイ・イドリス2世廟」、9世紀にマドラサも併設されて10世紀には大学の機能を持つようになったイスラム最古の大学「カラウィーン・モスク」を見学しました。スークには野菜や果物が豊富にあり、チーズや肉、本、香水、アクセサリ、衣類、靴など、様々なものが売られていました。フェズの旧市街で伝統的な手工芸の一つが皮なめしです。なめした皮を鮮やかな色に染めていきます。この職人街では“タンネリ”という動物の皮に耐久性をつけ柔らかくする作業をしており、すごい臭いでした。また、陶器工場も見学しました。フェズの陶器はモロッコでも有名で、青色(フェズ・ブルー)が特徴です。

中世末期にすでに10万の住民で密集していた旧市街は、外からの武力侵略をうけることもなく、中世的なイスラム都市の姿をとどめています。数々のモスクをはじめとする歴史的モニュメントを残すこの街が、広くイスラム世界全域を通じて、最も完全で貴重な歴史と文化の“証人”であることは間違いありません。この街は1981年に世界遺産に指定され、保全に力が注がれています。



モロッコ風にアレンジされたベリーダンス

夜はモロッコ風にアレンジされたベリーダンスやマジックショーを観ながらモロッコ料理を楽しみました。モロッコ料理の代表は「タジン」。「タジン」とは、タジンという変わった形の土鍋を使って野菜や肉を煮込んだ料理全般



モロッコを代表する煮込み料理“タジン”

をさし、料理の種類はいろいろあるようです。私は煮込み料理がもともと好きなので、旅行中に食べた「タジン」はほぼはずれなく美味しかったです。

ホテルを出発し、大アトラス山脈を越えてサハラ砂漠の入口エルフードへ向かいます。アトラス山脈はヨーロッパプレートとアフリカプレートの押し合いによって生じたもので、モロッコでは北東から南西にモワイヤン・アトラス(中アトラス山脈)、オート・アトラス(高アトラス山脈)、アンチ・アトラスの3つの山脈が少しずつずれて走っています。

最初の休憩は標高 1,600m のイフレン。モロッコのスイスと呼ばれるイフレンは美しい街で、ここには国王の宮殿があります。また、イフレンの私立大学「アハウェイン大学」は有名校で、ヨーロッパからの留学生も大勢います。徐々に標高が上がってくると、バスは「アトラス杉」の森の中へと。「アトラス杉」はヒマラヤ杉の一種で、高さが 60m にも達します。この木は“神聖な木”とみなされ、古代エジプトではミイラの棺に使われていました。2 回目の休憩は標高 2,178m のザード峠。雪を抱く「アヤシ山」(3,300m)を眺めているとノマド(遊牧民)が集まってきました。リンゴの産地で有名なアトラス山脈の麓の町ミデルトで昼食。メニューは



高さが 60m にも達する“アトラス杉”の森

アトラス山脈の湖で獲れた鱒と特産のリンゴを使ったタルトでした。最後の休憩はサハラの民の重要な交易拠点エル・ランディヤ。到着直前にはホテル近くの化石工場も見学しました。この辺りにアンモナイトやオウム貝などの化石がたくさんあるのは、遥か昔、ここが海だったからと聞かされてビックリ。今晚のホテルの宿泊



メルズーガの大砂丘を“砂漠の船”で



ヤギとラクダの毛で作ったベドウィンのテント

客は私たち一行だけとのことで、貸し切り同然に大満足。早速「ハマム」に入り 30 代くらいの女性 2 人に垢擦りをしてもらいました (30 分, 100DH)。チョー、キモチイー！

早朝 5 時 30 分にランドクルザーに乗り、ホテルを出発。サハラ砂漠の大砂丘が広がるメルズーガにて日の出を見物。ここは、一面に砂丘が広がり風紋が重なるサラサラの砂砂漠。世界最大の砂漠(日本の 20 数倍もの広さ)であるサ

ハラ砂漠において、砂砂漠の占める割合はわずか 2 割程度です(8 割はれき(小石)砂漠と岩石砂漠)。砂漠の日の出を見た後は遊牧の民ベドウィンのテントで朝食を食べました。

その後、トドラ峡谷の入口で緑豊かなオアシスの町ティネリールへと。道中、「カッターラ(カナート)」が至るところにありました。「カッターラ」とはトンネル式の地下導水路で、地下水を採るために深く掘って縦穴とし、盛土と



巨大な岩壁が左右に迫る雄大なトドラ峡谷

なっているものです。これは地下水脈(水源)を探り当てたら、水の蒸発を避けるために造られたもので、長さ20~40mの縦穴をいくつも掘って、それらをトンネルで繋ぎます。カッターラの長さは数km~数10kmにも及びます。

たくさんの実をつけたナツメヤシの木々と満開のアーモンドの花が綺麗なティネリールを経て、巨大な岩壁が左右に迫る雄大なトドラ峡谷へと。トドラ峡谷は山脈が亀裂してできた巨大な断層で、高さ200~300mの断崖絶壁が続きます。道がだんだん狭くなり、鋭く切り立った崖が両側から迫ってきます。切り立った岩の間には水が湧いていて、それが小川となって流れています。ここは、モロッコ人に人気の避暑地であり、ロックライミングの人気スポットとしてもよく知られています。

その後、カスバ街道を通り、サハラ砂漠の拠点ワルザザートへ向かいました。その名のとおり道中には至るところにカスバ(要塞)がありました。かつて、この辺りは部族間の争いが激しく、敵からの攻撃を避けるために山や丘の中腹

に城壁で囲まれたカスバを築きました。大小1,000ものカスバがあるとのこと。途中、バラの一大産地カラ・デ・メグーナで休憩し、夕方ホテルに到着しました。

朝から「グラヴィ家」の「タウリルトのカスバ」と映画「アラビアのロレンス」にも使われた「ティフルトゥトのカスバ」を見学しました。カスバ街道に多く見られるカスバは、その土地の領主の城や館で、穀物倉庫などを兼ねています。「タウリルトのカスバ」の「グラヴィ家」はベルベル人のリーダーとして18世紀よりマラケシュからドラア谷へ続くルートを支配していました。カスバは大きくてガッチリしていますが、泥や粘土で造られているため予想外の大雨が降ると崩れてしまいます。また、内部は外からの侵入に備えて迷路化しています。

茶色の荒涼とした道に緑輝くオアシスの町、そしてベルベル人独特の伝統文化を反映したカスバが外からの侵入を一切拒むように道沿いに点在するカスバ街道とは別れ、アトラス山脈を越えてマラケシュへと。ワルザザートからマラケシュまでは200kmです。

途中、本日のメインである今なお残る日干しレンガの要塞村アイト・ベン・ハドゥに立ち寄りました。モロッコの高地にはイスラムの勢力に押されるようにして移動してきたベルベル人の村が数多く存在します。どの村も異民族との闘いに備えて要塞化されています。難攻不落の要塞村アイト・ベン・ハドゥはその代表格で、公共の建物も民家もいずれもが闘いに備えた戦闘的な特性をよく残しています。防壁の中の塔の壁には飾り窓に見せかけた銃眼が配置されており、侵入者を阻むために複雑に入り組んだ路地には大小の住宅が密集しています。そして丘の頂きに建つ穀物倉庫には有事の際に最後の頼みとなる食糧を保管しています。古代キュビズムの傑作と評する人もいるアイト・ベン・ハドゥは、集落構造も昔のまま残っており、細部の保存状態も良好で、世界遺産に登録されています。各国の映画製作者もこの村を映画のローケーションに利用しており、「アラビアのロレ



村全体が要塞化されたアイト・ベン・ハドゥ

ンス」や「グラディエーター」もここで撮影されました。高アトラス山脈の中腹に位置する土造りの要塞村アイト・ベン・ハドゥは、見るものを圧倒せずにはおきません。今や忘れられつつある古代建築技術が、この村に集約されています。

その後はオート・アトラスのティシュカ峠を越え、モロッコのすべてが凝縮された町マラケシュへとバスはひたすら山道を走り続けました。ティシュカ峠はモロッコの道路の最高地点(標高2,260m)で、ここでは山で採れるいろいろな鉱物を売っていました。「アルガンの木」もアトラス山脈の名物です。4mの高さの「アルガンの木」はヤギの大好物で、多数のヤギがこの木に登っています。果実の種子からとれるアルガンオイルは食用油や美顔・美肌用のコスメティック油として使用され、木は木炭として使われます。

1ヵ月前にオープンしたばかりの豪華なホテルに無事到着。マラケシュの新市街の一角は巨大な超豪華ホテルの建設ラッシュで、数年後にはラスベガスようになってしまうでしょう。

モロッコという国名は、ヨーロッパ人が「マラケシュ」を「モロッコ」と訛って発音したことに由来しています。人口約100万人のマラケ

シュは、アトラス山脈の麓に広がるオアシスに築かれた町。フェズに次いで2番目に古い古都で、1070年頃にベルベル人による最初のイスラム王朝「ムラービト朝」が興り、マラケシュは首都となります。以後、街はサハラ砂漠への隊商路の基点として賑わうようになり、歴代王朝の君主たちはマラケシュの街を美しく飾ろうと競い合い、惜しめない努力を傾けました。

本日は、密集したスーク、買い物客の群れ、大道芸人と“血沸き、肉踊る”刺激的な街を終日観光。まず12世紀に造られた「メラナ宮殿」を訪れました。オリーブの木がたくさんある広大な庭園で、中央には「カッターラ」の技法でアトラス山脈からひかれた水を湛える貯水池があります。壮麗な“輝く宮殿”こと「バヒア宮殿」は、19世紀に1,000人余の職人の手で7年かけて建設された「バ・アフマド」(当時の総理大臣)の大宮殿です。中庭に面してずらりと並ぶ部屋は4人の妃と24人の愛妾の個室で、どの部屋も天井は美しい細密画で飾られています。「サアド朝の霊廟」は16～17世紀の代々のスルタンの墓が集まる王墓群です。「ムワッヒド朝」時代に遡る「アグノー門」は、かつてスルタンが宮殿に行く時に通った門で、アーチの周囲に花卉形の模様が施されています。



アーチの周囲に花卉形の模様が施されているアグノー門



マラケシュのシンボル、クトゥビアのミナレット

「クトゥビア・モスクのミナレット」はマラケシュで最も高い建造物で、街のシンボルです。「ムラービト朝」に代わってマラケシュを治めた「ムワッヒド朝」時代に建立されたもので、12世紀の名建築とあってよく、今日ですらアフリカ北西部のマグレブ地方で新たにミナレット

を建てる際には、その均整のとれた姿が手本とされています。この塔は、ラバトの「ハッサンの塔」、セビリヤの「ヒラルダの塔」と同じデザインです。現在その歴史的遺産の保存について、専門家間で憂慮の声があがっています。少なからぬ建物が崩壊の危機に瀕している一方、歴史ある庭園が更地にされ、建築用地に転換されつつあるからです。ちなみに「クトゥビア」とは“本屋”という意味で、かつてモスクの周りで本がたくさん売られていたためにこの名がついたそうです。

昼食後はメディナを散策し、街の中心に位置する「ジュマ・エル・フナ広場」へと。街では高い所にいくつもコウノトリの巣があり、コウノトリをたくさん見ました。国営のショッピングセンターに立ち寄り土産物を買ったり、薬屋を見学してかゆみやいびき止めのスパイスやアルガンオイルを買ったりしました。「ジュマ・エル・フナ」とはアラビア語で“死者達の集会”という意味です。昔はこの広場で公開処刑が行われていましたが、今は大道芸人が集い、露天をはじめ土産物探しに最適なお店が数多く並んでいます。ここでは迂闊にマラケシュ名物の水売り(ゲラブ)や蛇使いのおじさんを写真に撮るとチップを払わなければならないので要注



メディナの中心地ジャマ・エル・フナ広場



迫力ある騎馬ショー“ファンタジア”

意。夜は「シェ・アリ(シェーザリ)」で遊牧民の民族音楽と迫力ある騎馬ショー「ファンタジア」を楽しみ、ケバブやクスクスを食べました。

いよいよ観光も最後となりました。マラケシュからカサブランカまで約230km。昨年開通したばかりの高速道路の沿道には黄色やオレンジ色の花畑があり、とても綺麗でした。カサブランカといえば映画「カサブランカ」。名台詞『君の瞳に乾杯』は、日本語字幕の金字塔です。

カサブランカは人口約500万人のモロッコ最大の都市。ラバトが政治の中心であるのに対し、カサブランカは経済の中心です。この港はアフリカで最大の貿易港として知られており、モロッコ経済を支えるリン鉱石の輸出港として重要な役割を担っています。ちなみにカサブランカの「カサ」は“家”，「ブランカ」は“白”という意味です。

1986～1993年に建造された「ハッサン2世の



モロッコでは最大のモスク、ハッサン2世モスク

モスク」はモロッコでは最大で、世界でも3番目に大きなモスクです。ここには25,000人もの信者を収容でき、地下にはハمامもあります。高さ200mのミナレットはカサブランカのシンボルです。このほかモハメド5世広場や現代風のメディナのスクを散策し、最終日の観光を終えました。

翌朝、空路、パリで乗り継ぎ、足掛け2日かけて帰国しました。

マグレブとはアラビア語で“日が没する”という意味合いがあります。イスラム教徒がアラ

ビア半島から西へ進出し、迎り着いたアフリカ大陸最果ての地。それがマグレブ地域です。古代ローマ帝国・ビザンツ帝国の残照の上に、イスラム教の文化が艶やかに花開き、それは今日に至るまで、脈々と受け継がれています。サハラ砂漠へ訪れれば、太陽の光に照らされた美しい砂の世界が広がります。広大に広がる砂の世界はまさに“最果ての地”にふさわしいのではないのでしょうか。朝夕が気持ちよい季節にサハラの砂の柔らかさを素足に感じてみては如何ですか。